

# 当時の国際関係から『三酔人経綸問答』を深めよう

共立女子大学教授 阿部恒久

## 「三酔人」の国際関係認識と主張

『三酔人経綸問答』は、間近に迫った憲法制定・国会開設をにらんで、日本はどのような政治体制、対外策をとったらよいかを、中心テーマとして書かれている。ここでは、「三酔人」が当時の国際関係をどのように認識していたか、それに対する処方箋はどうであったか、という問題について深めてみたい。

まず、洋学紳士は、「イギリス・フランス・ドイツ・ロシアの4大強国を生み出した原因は『自由の大義』にあり」（岩波文庫版、現代語訳、以下同、p.23）、「日本も自由・民主の国になり、さらに軍備も全廃して『平安』を選び取るべきだ」（p.58）と主張する。

他方、豪傑君は、「ロシア、イギリス、ドイツ、フランス、たがいに眼をいからせ、おのおの腕をさすり、機会があり次第おっぱじめてくれようという有様は、まるで爆薬を積みかさねて地べたにころがすようなものです」（p.64）と言い、「国土は広く資源は豊かだが弱い国があれば、日本はその国の一部を割き取って大国化・富強化し、さらに『欧米の文明の成果を買い取』って、欧米の侮りを防ぐべきだ」（p.71）と主張する。

これに対して南海先生は、「四国の勢力がだいたいつり合っているから、彼らはみなやむを得ず、多少とも国際法を守らなければならない。多くの小国が、併呑の禍いから免れ

ているのは、こういう理由からです」（p.103）と述べ、「わがアジア諸国の兵隊は、それで侵略しようとするときには不十分だけれども、それで防衛するには十二分なのです」（p.105）と主張する。

以上のように、「三酔人」はイギリス・フランス・ドイツ・ロシアを4大強国と認識し、その脅威を前提に、日本はどのように対処していくべきかを主張している。それは、洋学紳士の軍備全廃論、豪傑君の弱国侵略による大国化論、南海先生の防衛軍論と大きく分かれている。そこで、当時の国際関係の要を整理し、理解を深めよう。

## 当時の国際関係の要点

当時のヨーロッパにおける緊張は、1870～71（明治3～4）年の普仏戦争で、プロシアがフランスを敗って国境地帯のアルサス・ロレーヌ地方を割譲したことに端を発している。戦争後も、プロシアを中心に成立したドイツ帝国とフランスの対立は続き、ヨーロッパにおける緊張の大きな源となっていた。しかし、ドイツの宰相ビスマルクが、多角的同盟外交を駆使してフランスの復讐を防止しようと務めたため、強い緊張はあるものの、ヨーロッパでは比較的安定した国際関係（ビスマルク体制）が続いていた。

他方、東アジアでは、1840～42年のアヘン戦争を画期として欧米列強の進出が本格化し、

明治維新（1868年）後の日本の動きも北東アジアの緊張を高めた。1882年の壬午事変、1884年の甲申事変では日本・朝鮮・清の3国間の対立が表面化した。清国は、壬午事変後、それまで形式的なものに過ぎなかった朝鮮に対する宗主権を実質化し、政治干渉を強めた。しかし、1885年4月、甲申事変を処理するため日清間で天津条約が調印され、日清両国の軍隊が朝鮮から撤退することになったため、緊張関係はいったん和らいだ。

だが、天津条約調印の3日前、朝鮮半島南端沖にある巨文島をイギリス軍艦が占領する事件が起きた。これは、ロシア軍がイギリスの保護国下にあったアフガニスタンに侵攻したことに対抗して、ロシアのウラジオストクを攻撃する基地として使うために占領したものであった。こうして中央・南アジアにおけるイギリスとロシアの対立が北東アジアにも及んできた（イギリス軍艦が巨文島から撤退するのは1887年3月のことである）。

1887年5月刊行の『三酔人経綸問答』のなかでも、豪傑君が巨文島事件に触れているが（p.91）、このときはイギリス軍艦の巨文島からの撤退後であったから、日清間の緊張とともに、英露間の緊張も一時的にはあれ、緩和していた。南海先生は「四国の勢力」のつり合いを強調するが、まだこの頃までは、そうした認識も可能であったといえよう。

なお、1884～85年の清仏戦争の結果、ベトナム全土がフランスの保護国下に置かれ、1886年には第三次ビルマ戦争の結果、イギリスが上部ビルマを併合し、ビルマ全土がインド帝国の一州になるなど、英仏の東アジアへの侵略は続いていた。南海先生の防衛軍論は空論にも思えるが、その論の前提には、立憲制への移行による挙国一致的な軍隊の成立が

あるので、もしアジア諸国でそのような軍隊が成立していたら、どうなっていたであろうか。

## 1890年代における国際関係の変化

### 一日清戦争・日露戦争への道

1890年代に入ると、以上にみてきた国際関係は崩れ始め、緊張の度が高まった。『三酔人経綸問答』刊行から間もない1888年、ドイツではヴィルヘルム2世が即位し、1890年、ビスマルクを退陣に追い込み、対外的拡張策を取り始めた。同年には、そうしたドイツに対抗する露仏同盟が成立し、ヨーロッパにおける緊張は激しさを増し始めた。

他方、1889年以降、朝鮮では、日本への穀物の輸出を禁止する防穀令発布や日本人商人の活動への反発から再び緊張が高まり、反日を掲げる東学党農民の決起をきっかけに、日本は朝鮮を日本の影響下に置こうとして清国との戦争（1894～95年）を始める。

日清戦争は日本の勝利に終わった。しかし、日本が清国から割譲した遼東半島を返還するように求めたロシアなどによる「三国干渉」を機に、ロシアは北東アジア進出を強めた。清国への財政支援に対する見返りとして鉄道敷設・租借地などの満州利権を獲得し、他方、朝鮮国王の求めに応じて朝鮮への影響力も強めていった。1900年の義和団事件後のロシア軍の満州駐留問題などをきっかけに日露間の緊張が高まり、やがて日露戦争（1904～05年）に繋がっていくことになる。

日本は、対外的には豪傑君が主張する道を歩んだが、国内的には立憲制・国会開設など南海先生の主張に沿う動きもあった。日清戦争の勝利は、立憲制・国会開設による挙国一致体制の成立と不可分であったといえよう。